



源氏物語の色 -44 「匂宮」

最愛の妻である紫の上が亡くなった翌年の正月、光源氏は新春を迎えても、未だ悲しみで気分が晴れぬ様子である。

長年紫の上に仕えてきた女房たちも濃い墨染（すみぞめ）の色の喪服を着て、紫の上を偲んでいるとある。墨染は墨で染めた様な黒色や灰色を表し、喪服、喪中の調度、僧や尼の衣服などに用いる。

この帖では、この年の毎月の出来事や心情が歳時記風に記されている。

四月、召人である中将の君が東の間でうたたねしているところに、光源氏が近づくと小柄で美しい中将の君は恥じらいながら起き上がる。その衣服は「紅の黄みがかかった色の袴に、萱草色（かんぞういろ）の単衣（ひとえ）、たいそう濃い鈍色に黒などを重ねて着て」とここでも紫の上の裳に服する衣服の記述がみられる。

鈍色や黒は喪服を示しているが、萱草色も喪服に多く用いられた色で、その染料は、梔子、黄檗（きはだ）と紅花、蘇芳と明礬（どうさ）など、所説ある。

十二月、晦日（つごもり）の日、心細い想いを詠んだ光源氏の歌に、その命の尽きる時が近づくのを感じさせられる（平山和香子）

●城一夫名誉会員を偲んでー 8

城一夫編著 『COLOR ATLAS 5510』
カラーチャートブック（純色カラースワッチ
61色付）世界慣用色名色域辞典光村推古書
院発行 全2巻 37,000円 1986年発行

カラーチャートブックは、印刷、インキ業界初の試みであった純色61色（有彩色60+無彩色1）を作成し、これを基本色として展開する等色相断面の色数5510色を印刷により再現しています。

また、5510色の各色は、一定の基準によって色相、明度、彩度を数値化していて、併せて世界各国（米・英・仏・日・中）の代表的な慣用色名3191色を表示、同一色名のもつ色域を測定し、これらの違いを明確にし、独自の色名の同定を行っています。

世界慣用色名色域辞典は、①色彩の歴史、②色相の意味と文化、③慣用色名解説（英・日・仏・中）で構成されていて、カラーチャートブックに記載された慣用色名と対応しながら、世界の色名・色域の同一性と差異を明確にし、世界の色について記述しています。

発売後、色票が欲しいという要望が各方面から寄せられ、約3年後にケースカバン付きの「カラーアトラス5510カラーガイド」が発売されました。（橋本実千代）

●大辞泉ひろいよみ 16ーい

色付け：色つけとも。物に色をつけること。彩色。新しいおもしろみや意味などを付け加えること。値段を安くしたり、おまけをつけたりすること。

色付ける：色を塗りつける。彩る。彩色する。単調な物事に、ある変化を加える。

色っぽい：異性を引きつけるような魅力にあふれている様。なまめかしい。いろっぽさ。

色艶：光沢のある色合い。特に、肌の色とつや。話や文章に付加されるおもしろみ。興趣。話や態度に感じられる愛想。情愛。

色所：遊里。色里。遊郭。男女の愛情が深い土地。人情の細やかな地方。

色止め：色止め。染物の色が、冷めたり落ちたりしないよう固着剤などで処理すること。

色留袖：着物の地色を黒以外の色にした留袖。

彩り・色取り：色をつけること。彩色。色の配合。配色。面白みや風情、華やかさなどを付け加えること

色取り月：陰暦9月の異称。

色鳥：色々の鳥。特に秋に渡ってくる小鳥。

色取り取り：種類がいろいろであること。

彩る・色取る：色をつける。彩色する。化粧する。さまざまな色や物を取り合わせて飾る。おもしろみや趣などを付け加える。（永田泰弘）